

二〇一八(平成三十)年度 金沢学院大学 入学試験問題

(推薦入試)

二〇一七年十一月四日(土)実施

国語 (基礎学力)

一 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから8ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

二 解答上の注意

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

④と解答する場合は、下記の(例)のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩



問題は、次のページからです。

問1 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は 1 ～ 5。

- (1) コウガンに徹する悪徳政治家。  
① 高顔 ② 紅顔 ③ 黄顔 ④ 好顔 ⑤ 厚顔
- (2) 自らの考えをコジする。  
① 固示 ② 固自 ③ 固辞 ④ 固持 ⑤ 固地
- (3) 起業のセイヒを分けるポイント。  
① 世否 ② 成否 ③ 精否 ④ 政否 ⑤ 正否
- (4) テキセイな労働時間管理。  
① 適正 ② 適生 ③ 適勢 ④ 適性 ⑤ 適制
- (5) ヒヨウハクの詩人。  
① 漂博 ② 漂伯 ③ 漂泊 ④ 漂白 ⑤ 漂拍

問2 次の(6)～(10)のカタカナ語の意味として最も適当なものを、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。

解答番号は 6 ～ 10。

- (6) アポイント (7) ウインウイン (8) コンテンツ (9) サマリー (10) モチベーション

語群

- ① 情報を要約したもの  
② 他人の気持ちを推し量ること  
③ 機器の配線  
④ メディア等を通して提供される情報  
⑤ 崩壊寸前の状態  
⑥ 双方に利益があること  
⑦ 面会の約束をすること  
⑧ 記憶力が優れていること  
⑨ 動機や意欲  
⑩ 目印をつけること

問3 次の(11)～(20)の各文のうち、日本語として正しいものには①、誤っているものには②をマークせよ。

解答番号は 11 ～ 20。

- (11) 愛嬌を振りまいてばかりいないで、ちゃんと仕事をしなさい。
- (12) 昨シーズンの雪辱を果たしたいと意気込む選手たち。
- (13) 舌の先の乾かぬうちに、また同じことをしてかした。
- (14) 取り付く島もないような、冷めた態度だった。
- (15) 寸暇を惜しまず、働きつづけた両親に感謝。
- (16) 前の試合の二の舞を踏まないように、しつかり練習しよう。
- (17) あなたには役不足で申し訳ないのだけれど、今日だけ電話番号をお願いしていい？
- (18) 議論が煮詰まってきた、もうちよつとで結論が出そうだから、最後まで頑張ろう。
- (19) 三月に入ると気温が緩み、穏やかな小春日和が続くでしょう。
- (20) あれだけ勉強したんだもの、彼が合格するのは火を見るより明らかだ。

問4 次の 21 ～ 25 に入れるのに最も適当な語を、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 25。

- (21) 火中の 21 を拾う。
- (22) 22 に塩。
- (23) 瓜のつるに 23 はならぬ。
- (24) 雨後の 24 。
- (25) 25 から駒。

語群	①	②	③	④	⑤
瓢箪	瓢箪	南瓜	栗	糸瓜	芋
茄子	茄子	松茸	筍	蓬	青菜

問5 次の(26)～(30)の四字熟語について、誤りがあれば例のように誤っている漢字の番号①～④を、誤りがなければ⑤をマークせよ。解答番号は  ～ 。

(例) 四面楚家 ↓ 正しくは「四面楚歌」なので、④をマーク。

(26) 温古知新

(27) 純心無垢

(28) 快刀乱麻

(29) 一陽来福

(30) 危機一髪

問6 次の(31)～(35)はいずれも有名な文学作品の末尾である。それぞれの作品の著者名を、語群①～⑥の中から一つずつ選べ。

解答番号は  ～ 。

(31) 勇者は、ひどく赤面した。

(32) 下人の行方は、誰も知らない。

(33) 虎は、既に白く光を失った月を仰いで、一声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

(34) そのころもて / 遠きみやこにかへらばや / 遠きみやこにかへらばや

(35) だから清の墓は小日向の養源寺にある。

語群 ① 宮澤賢治 ② 夏目漱石 ③ 芥川龍之介

④ 中島敦

⑤ 太宰治

⑥ 室生犀星

## 問7 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

柳田國男は「涕泣史談」(昭和十六年)の中で近代になって日本人はだんだん泣かなくなった、といっている。柳田から三十年後、多田道太郎は「しぐさの日本文化」(昭和四十七年)の中で同じことを述べてこういう、日本人はもつと泣かなくなったと。

三十年を一世代という、いままた多田より一世代をへて、日本人はほとんど泣かなくなった。

昔はよく本を読んで泣いたものである。いまはまずそんなことはない。あの泣かせる文章たちはどこへ行ったのか。最初にあげるのは下村湖人の「次郎物語」である。

若い人でもこの本の題名だけは知っているだろう。全五部、少年期から青年期への自己成長を綴ったこの半自伝的教養小説は、三十年構想をあためた著者五十二歳の年にはじめて執筆され、以後二十年をかけて書きつがれた。下村湖人の生涯はこれ一作、ずいぶん数奇な本である。第一部の刊行は昭和十六年だが、終戦後爆発的なベスト・セラーとなった。この年代の人でこの本を手にしたことのない人はほとんどいないだろう。そして多くの経験からしても、これはもつともよく泣けた本だった(特に第一部の幼年時代が)。

再読してみて、どんな所で泣いたか、はつきり想い出した。里子に出されていた次郎が実家に帰されると、兄弟からも母からもうとまれてなじめない。肉親らしい愛情を感じるのは父親だけである。実家へ帰ってすぐの夏、父の俊亮は縁台に莫塵を敷いてゴロリと寝ている。

次郎は最初遠慮がちに縁台に腰を下したが、間もなく父と三四寸の間隔をおいて、自分もごろりと横になった。彼はなぜか、父の真っ白な、ふつくらした裸に、自分の体をくつつけてみたくなった。彼の汗ばんだ体は、蚊にさされたところを搔くような恰好をしながら、じりじりと父にくつついて行った。

「汚ないっ。」

俊亮はだしぬけに、びっくりするような声で呶鳴りながら、はね起きた。(略)

「次郎のべとべとする体が、だしぬけにさわったもんだから、びっくりしたんだよ。」

ここで泣いたことをよく覚えている。肉親の話が涙をさそう大きな素材なことは当り前だが、〈肉親の肉体への接触感〉こそが、読者を泣かせる最大のものではなからうか。次郎がやがて母親と和解し、その母が急に臨終をむかえることになる件<sup>くだ</sup>りを見よう。

臨終の少し前に、次郎たち兄弟は年の順に死水をとってやった。次郎は鳥の羽根を母の唇にあてながら、母がかすかにうなずくのを見るような気がした。彼は不思議に涙が出なかった。左右に恭一と俊三とが、しきりに鼻をすすっている音を耳にしながら、彼はただ一心に母の顔を見つめていた。彼は母のすべてを深く心に刻みつけて置こうとするかのようにであった。彼の両腕は棒のように彼の膝の上につっ張っていた。

いよいよ臨終が宣告されて、周囲がざわめき出しても、彼はやはり石のように<sup>すわ</sup>に坐っていた。恭一と俊三とが両方から彼の顔をのぞいて立ち上ったのにも、彼は気がつかなかったらしい。

「次郎——」

正木のお祖父さんが、うしろから、そっと彼の肩をたたいた。彼はやっと自分にかえって、眼を母の顔から離れた。そして、その時はじめてすべてを諒<sup>りようかい</sup>解したかのように、彼の眼に涙がこみあげて来た。彼はいきなり畳の上につっ伏して声をあげた。

母の実家の正木の祖父が次郎の肩をたたき、その接触感が次郎の涙の堰<sup>せき</sup>を切らせる。読者のほうがまたここで、こらえていた涙があふれてくる。ここでも〈肉親の肉体への接触感〉は泣くことの大きな<sup>注</sup>モメントである。

「涙の歴史」(A・V・ビューフォー)という本があつて、西欧の本の中の泣くところをさまざま引用してあるのだが、どうもこの〈肉親の肉体への接触感〉で泣くのは洋の東西を問わずということではなくて、かなり日本独自のものらしい。これは興味を引く事実である。

しかし「次郎物語」でいちばん泣けた記憶は、父の事業が失敗して次郎が母の実家の正木の家へいったん引きとられるところである。次郎をつれて夜道に行く正木の祖父はこういう。



「次郎、あれが北極星じゃ。」

正木の老人は、ふいに道の曲り角で立ち止って、遠い空を指さした。

次郎は、指さされた方に眼をやったが、どれが北極星だか、すこしも見当がつかなかった。彼の眼には、まだ父の顔がぼんやりと残っていて、その顔の中に星がまばらに光っていた。

「学校で教わらなかったかの？」（略）

いつまでも動かない星。——それが、ふと、ある力をもって、次郎の心を支配しはじめた。彼は歩きながら、ちよいちよい空を仰いで、北極星を見失うまいとつとめた。（略）

「眠たいかの。」

「……」

「こけるといけない。手をつないでやろう。」

次郎の手を握った老人の掌は、しなびていた。しかし、その皮膚の底から、柔かに伝わって来るあたたか味にふれると、彼はしみじみとした喜びを感じた。そして、急に明るい気分になって訊ねた。

「僕、お祖父さんとここに、いつまでいるの？」

「いつまででもいい。」

自分を愛してくれる人間からの肉体の接触が、大きな自然の中で行われる時、日本人はいちばん泣ける。この箇所ですべて声をあげて泣いたことをよく覚えていて。

（鴨下信一『忘れられた名文たち 其ノ二 日本人はこんな文章を書いてきた』による）

（注）モメント……契機。きっかけ。

問い 本文の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。解答番号は 36 ～ 45。

- (36) この文章が書かれたのは平成十年代である。
- (37) 最近の文学作品には読者を泣かせるものが少ない。
- (38) 「次郎物語」が爆発的に読者に読まれるようになったのは、第一部が刊行された昭和十六年ではなく、終戦後である。
- (39) 俊亮が自らの体に接触してきた次郎を激しく拒絶したのは、次郎が血のつながっていない子どもだったからである。
- (40) 〈肉親の肉体への接触感〉は肉親をテーマにした話題の中で、もっとも重要である。
- (41) 次郎は母が臨終を迎えても、母の顔を見つめたまま、動かなかったが、祖父に肩をたたかれたことで我に返り、母の死を認識した。
- (42) 〈肉親の肉体への接触感〉で泣くのは世界共通であるが、日本人は特に強いこだわりを持っている。
- (43) 次郎が北極星を見つけられなかったのは、北の星の並び方が父の顔の形に似ていたからである。
- (44) 正木の祖父の手のぬくもりによって、次郎の不安な気持ちは和らいだ。
- (45) 大自然の中で自分を愛してくれる人から触れられると、日本人は泣く。

問8 【終わりの2行】の文に続くように、次の①～⑤の枠の文章を並べ替え、その2番目と4番目に位置するものの番号を答えよ。

解答番号は2番目 46、4番目 47。

① 身近な例を挙げてみます。みなさんは、電車内で女性が化粧をするのをどう思いますか。不快な感じがするでしょうか、それとも、あまり気になりませんか。東京のある鉄道会社は、車内化粧が増えていることを受けて、「マナー違反で、みっともないからやめましょう」と利用者に訴えかける広告を作りました。

読者には若い方が多いでしょうから、もしかすると「化粧をしたって、人に迷惑をかけているわけではないのだから、問題ないんじゃないの」という意見があるかもしれません。

② 「道徳」と聞いてみなさんは何を思い浮かべますか。規範意識やしつけ、それとも倫理感や価値観でしょうか。『広辞苑』によると、「人のふみ行うべき道。ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として、一般に承認されている規範の総体。法律のような外面的強制力を伴うものでなく、個人の内面的な原理」とあります。かみ砕いてみると、法律で罰せられるものではないけれど、社会生活を営む上で、共同体を形成する人の心の中に共通して存在している規範ということになるでしょうか。

③ しかし、この広告を見たとりわけ若い世代からは「無害なのに、「みつともない」という理由だけでなぜ批判されるのか」「よっぱらいや痴漢など、迷惑な客は他にもいる」と反発する声がインターネット上に書き込まれました。

私自身も、かつて後輩の若い男性記者と雑談をした時に、強烈な一発をお見舞いされたことがあります。「車内で化粧をする女性より、新聞を広げて読んでいるおやじの方がよほど迷惑だと思っただけです」。当時は私も通勤電車ですり革につかまり、新聞を四つ折りにして読むおやじの一人でした。最近ではスマホやタブレット端末の普及で、新聞を広げる乗客を見る機会はほとんどなくなりましたが、世代によってこれほど感覚が違うものかと驚いた覚えがあります。

④ こうした規範や価値観は、社会や家庭によって何世代にもわたって慣習的に引き継がれていくものです。ただ、近年は価値観が多様化し、社会や家庭の伝承力も弱まってきて、「共通して存在」しなくなってきたものもあります。

⑤ それでは、少し想像力を膨らませてみましょうか。車内で物を食べる行為だったらいかがですか。食べこぼしやにおいがなければ「人に迷惑をかけてはいない」と強弁できるかもしれませんが、隣の座席で飲食されて気にならない人はほとんどいないはず。同様に考えていくと、車内の化粧に多くの人が抵抗を感じるのには理解できるでしょう。年齢の高い方の中には「車内で化粧なんてとんでもない。議論の余地などまったくない」と、切って捨てる人もいるかもしれません。鉄道会社も、車内での化粧は道徳的に正しくない行為として利用者に理解を求めたのです。

## 【終わりの2行】

とはいえ、二、三十年前までは、車内で化粧する人に遭遇することは一度もなく、鉄道会社がわざわざマナー違反の広告を出す必要もありませんでした。この間に規範に関する考え方が、微妙に変化してきたのです。

(名古屋隆彦『質問する、問い返す 主体的に学ぶということ』による)